

ニエト+ソベハノ

「アルヴォ・ペルト・センター」

設計=ニエト+ソベハノ・アルキテクツ

自然の声を聞く、音楽を聞く マッシモ・クルツィ

参照 | 本誌pp.3-17

2011年に開催されたアルヴォ・ペルト・センター設計競技の最終選考に残った設計案を見直すと、審査委員会が選んだのは直線的な空間構成をもたない数少ないプロポーザル案のひとつだったことが分かる。スペインの建築家デュオ、ニエト+ソベハノ・アルキテクツの設計案は、輪郭が曲線的な建築ボリュームを提案するものだ。その有機的なフォルムは、首都タリンから35キロ離れたラウラスマーのバルト海沿岸に密集して生える松林に挿入されている。審査委員会が行った選択は形態的側面を重視している。そのフォルムはある点で、この新しい施設が捧げられたエストニアの巨匠の作曲アプローチと関係している。アルヴォ・ペルト・センターには音楽を聞くための複数の空間と1つのコンサート・ホールのほか、アーカイブ、展示スペース、教育普及スペースが置かれている。作曲家アルヴォ・ペルトの作品が有名になり関心が高まったことが、センター建設の強い動機となった。1935年にハイデに生まれ、ラクヴェレ——首都タリンにほど近いエストニアの小都市——で育ったアルヴォ・ペルトは、時間をかけて自らの芸術思想を発展させ、1970年代の無調音楽から出発し、グレゴリオ聖歌やバロック音楽からヒントを得て、ミニマリズムと見なされたある種の宗教音楽に到達した。彼の芸術はテインティナブリ[鐘鳴り]様式と呼ばれる、厳密な規則に基づく高度に独創的な作曲法を生み出した。

周知のように、造形芸術におけるミニマリズムはプロセスを常に明示してきた。ペルトの場合、新たな作曲法は三和音と音階のみを使う。音のハーモニーにおいて、2つの3度音階——ほぼすべての和音の基礎となるもの——



傾斜屋根より
見る



空からの全景

に基づく構成は三和音と定義される。ペルトの考えによると、「テインティナブリはある列[メロディー]と別の列[ハーモニー]の正確な接続です。この規則に従うと、メロディーとそれに伴う声部がひとつになる。1+1は1であり、2ではない。それがこの技法の秘密です」[注]。この作曲法を洗練させることによって、彼は現代における宗教音楽の最も重要な作曲家の一人になった。数多くの熱心な聴衆が、高い関心を持って彼の動きを追っている。アルヴォ・ペルト・センターを読み解いていると、建築の目的はただ単に空間を囲み内部に場を与えることではなく、建築的境界の計算された両義性のようなものを誘発することではないかと考えたくなる。かくしてセンターに向かうと、樹木の力強いマスをくぐり抜けることがプロジェクトの一部となり、通過すべきもうひとつの建築的ボリュームに変わ

る。建物のフォルムは先に述べた事柄を裏付ける。建築的ボリュームとファサードには明らかにヒエラルキーが不存在で、構成要素による一種の民主主義となっているが、そこから来訪者を作品の中に寛大に包み込む感覚が生まれる。輪郭を形づくるガラス壁の湾曲した運びにも、屋内空間の分割方法にも、さらに外周の列柱を構成する各要素の立体的ディテールに至るまで、角という角が存在しないまま、全体として流動性の達成、光と影の淀みない流れを語り、センター内部での来訪者の自由な動きと調和している。最も雄弁に語るのが航空写真だ。設計案がいかに屋根をもう1つのファサードに変えることを追求したかが分かる。その雨水が流れ落ちるのを助ける1枚の直線的な屋根面は、規模の異なるパティオで中断される。パティオのおかげで、広大なボリュームの中央部

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2019 Arnaldo Mondadori Editore

©2019 Architects Studio Japan



パティオ



東側ファサード



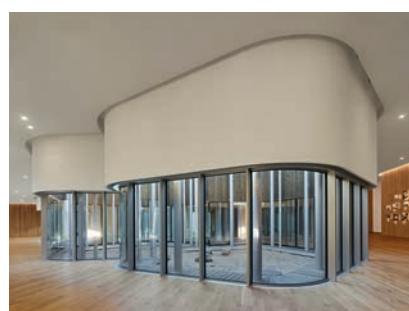
パティオ内の礼拝堂

まで自然光が射し込む。屋根の傾斜線は北から南に伸びて最大となってから下降し、センターへの出入口が置かれた南端において建物高は低くなり、より親密でこぢんまりとされている。また同時に、海のある北を向いた部分は、最大高さのガラス壁によってゆったりとされている。北からの光は絵画制作や作業に最良であることは万人に知られている。この光が、湾曲した白い垂直の壁と板敷の連続した床を特徴とする内部空間の雰囲気を決定する。太陽の向きの正確な測定に基づき、北側と北東側にオフィス、教育普及室、コンサート用大ホールが置かれ、中央に位置する建物の「保護された内臓」はアーカイブと閲覧室に充てられた。この巨大で有機的な平面図の中央の、最も深奥部に規模のさまざまなパティオが開ける。採光口だが、四季の変化を知らせる屋外空間でもあるパティオは、屋内空間を特徴づける滑らかな連続性に一種の休止をもたらす。相交わる機能プログラムと調和するよう計算された「穴」である。

これら露天の中庭のうち最も大きいものには、瞑想と祈祷のための小礼拝堂が置かれている。これはプリミティブなフォルムを帯び現代の建設技術を用いた小さな建築的ヴォリュームで、全体の空間構成とは異なった角度が与えられ、大きなヴォリュームの中央部に配置された。故意に両義的な性質を与えられているため、既存建築にも他所から運ばれてきた断片にも感じられる。建築的ヴォリュームが木々の密生する北欧の森に「沈下する」には、



閲覧スペース



内部よりパティオを見る



コンサート・ホール

設計のレベルで対位法を必要とする。そこから、建物に展望タワーを隣接させるアイデアが生まれた。タワーはセンターに近づいてくる人の目印になると同時に、海の近さを知覚できるようにする。これとは別に、2つのポイントが建物の性質をよりよく理解する助けとなる。外壁に沿って撮られた写真を見ると、外縁部の足元廻りと森林の間に高低差がないことが分かる。このディテールによって、建築的ヴォリュームと森の連続性が探求されたことがさらに強調される。注目すべきもう一つのポイントは、駐車場をセンターからかなり離して設置したことだ。これによって、鬱蒼とした森を通ってセンターに接近することがプロジェクトの一部となった。五感が浄化される過程で、精神集中と瞑想の契機となった。まさに、エストニアの巨匠ペルトの音楽そのものが常に探し続けたように。

[注]

2000年3月29日にロンドンの王立音楽アカデミーでBBCラジオ3が行ったインタビューからの抜粋。同インタビューは、ナクソス・レコードから発売されたCD『Passio』の付録リブレットに収録されている。アルヴォ・ペルトの音楽をより深く知るには次の文献を参照されたい。
Arvo Pärt. Allo specchio, a cura di Enzo Restagno, il Saggiatore, 2004.

作品:アルヴォ・ペルト・センター

設計:ニエト+ソベハノ・アルキテクツ——

フェンサンタ・ニエト、エンリク・ソベハノ

ローカル・アーキテクト:Luhse & Tuhal: RaLuhse & Tanel Tuhal

設計競技チーム:Alfredo Baladrón, Víctor Esquivel,

Victor Mascato, Juan Carlos Redondo, Paolo Russo,

Evelina Vasiliauskaitė

プロジェクト・アーキテクト:Alexandra Sobral

設計チーム:Simone Lorenzon, Covadonga Blasco, Pablo Gómez,

ヴォー州議会場の変遷

参照 | 本誌p.22

1803年4月14日——ヴォー自治州の設置、180人の州議会議員が初めて招集される。
1872年——大会議場の収容力を巡る最初の公的議論。
1997年——新州議会場のアイデア・コンペ。エスプラナード下に地下ホール新設を提案したプロポーザル案が優勝。
2002年5月13-14日——修復中の建物が夜間に発生した火災で焼失。
2003年——新ヴォー州政府始動。200年前に選ばれた場所に州議会場を再建する意志が確認される。選出州議会議員数は150人に削減。
2009年6月5日——ローザンヌの建築設計事務所アトリエ・キューブがバルセロナのボネル・イ・ヒル事務所と連名で提出した「ローズバッド(薔薇の薔)」案が、2007年に公示された設計競技で優勝。
2010年8月18日——新ヴォー州議会場建設のための「州努力計画条例328号」制定。
2012年2月16日——建築許可の承認。
2012年6月——新ヴォー州議会場建設費用の承認。
2012年7月——「Non au toit(屋根にノーを)」住民投票実施を求める署名が16,000筆集まる。
2012年11月——住民投票の保留後、修正された建設費用の承認。
2013年5月31日——新ヴォー州議会場建設費に充当する貸し付けを承認した「ヴォー州憲法裁判所」判決に対する不服申し立てを、連邦裁判所が却下。
2013年11月21日——設計案の修正に伴い新たな建築許可の承認。
2014年3月24日——着工、定礎式。
2014年10月17日——14世紀に遡る壁画の発見とそれに伴う設計案の修正。
2016年4月——躯体と屋根の完成。
2016年4月14日——新ヴォー州議会場の公式落成式。

偉大なる様式の建築と、直接民主制の気まぐれ

ニコラ・ブラギエーリ

参照 | 本誌p.23

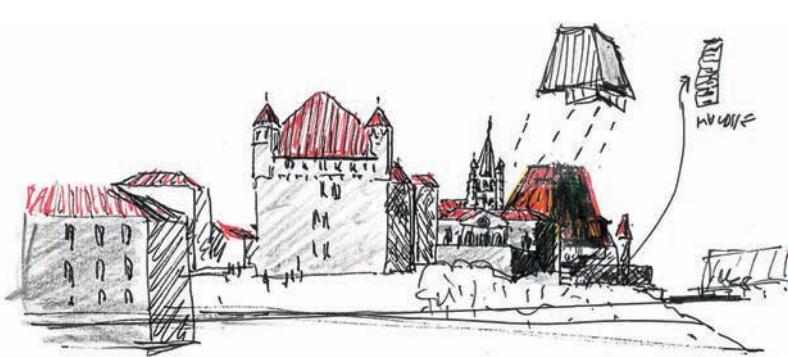
今日ローザンヌ市に高く聳える巨大な赤屋根は、長年にわたり同市の政治的・文化的生活を翻弄したある不吉な経緯の幸福な結末である。なぜ幸福かというと、当初のアイデアに比べてフォルムや素材の一部を悪いほうに変質させる逆境が続いたにもかかわらず、プロジェクトは総体として、また高いクオリティをもって完成に至ったからである。プロジェクト実現にわずか1フランでも賭ける者はほとんどいなかったはずだ。なぜ不吉かというと、この成果を得るために、不同意の専門家集団(Neinsagenすなわち「ミスター・ノーたち」と侮蔑的に呼ばれた)と政治愛好家らに支払われた値段は、損害をもたらす不適切なものだったからだ。市民共同体を、味覚や胃腸の問題などを最適に解決する有資格の専門家に委ねることのできる知的な集合体と捉えるなら、共同体の利益に多大な損害を与えた。この場合、専門家とは設計競技の審査委員会を指す。建築を、そのより広い文化的・社会的次元から捉え、日和見主義からも時期によって変わる関心や気まぐれからも自律したものとみなすなら、今回の事態は建築にとってひどく不適切なものだった。

ローザンヌの屋根の話は、行政裁判と直接民主制の擁護者全員を深く反省させて然るべきである。訴訟も直接民主制も、俄作りのアマチュア政治評論家や経験豊富な交渉の専門家の手に渡ると、不運で下卑な手段になってしまう。即席の政治アマチュアは、すでに現代のあらゆる政治状況の活発な一部になっている。百戦錬磨の交渉人は、コンセンサスに導くことも不信を産むことも



完成した議場

できる法律事務所そのものである。ヴォー州の新議会場の歴史は、2009年の設計競技での訴訟からすでに幸先が悪かったと言わざるを得ない。ある退官間近の著名な地元の大学教授は最終選考に残れなかったが、相当にアクロバティックな戦略のおかげで6ヶ月以上も選考手続きをストップさせることに成功した。スイスに限らず、あちこちで見聞きしたような話だ。ようやく設計競技再開のゴーサインが出て、「薔薇の薔」案が優勝案に選ばれると、着工に向けてすべてが急速に動き始めた。ただし右派の州議会議員2人が、いくつかの市民団体と数人の建築家の支援を受けて、「No au toit(屋根にノーを)」住民投票を公示するための署名活動を推進した。彼らの動機はおもに「地元の伝統と合致しない美的嗜好」という性質のものだった。その間に、新「大評議会」すなわち新州政府が設置され、大胆にもボリュームを縮小し、フォルムを単純化し、素材を慣れ親しんだものに替え、予算を増やした設計案を、夜のうちに提出するよう建築家に求めた。この戦略のおかげで、連邦裁判所は旧設計案に対する住民投票を無効とし、事実上、変更した設計案の



スタディ・スケッチ



傾斜屋根のスタディ・モデル

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

©2019 Arnoldo Mondadori Editore

©2019 Architects Studio Japan

マカルク・ムルヴィン・ アーキテクツ

【サバンナ13——ブンカーハウスへのコンバージョン】

設計:シェルシエ・アルキテクテール

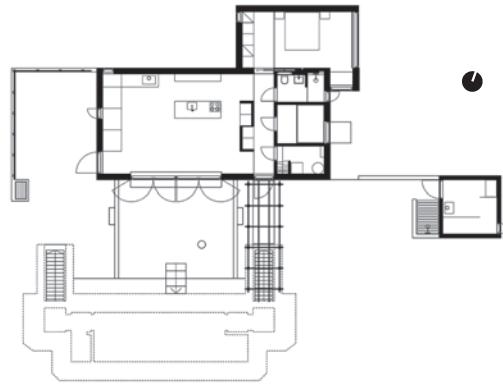
建築主:個人

規模:延床面積 130 m²

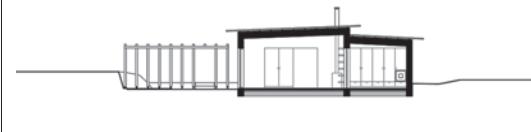
スケジュール:設計・施工 2017年

所在地:Bungenäs, Gotland, Sweden

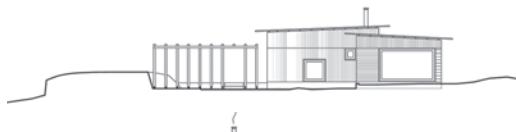
参照:本誌 pp.37, 46-49



平面図



断面図



立面図



左に木造棟、正面にパーゴラを見る



住宅内部



住宅内部



新設された木造棟

「タパー工科大学男子学生寮」

設計:マカルク・ムルヴィン・アーキテクツ

ダブリンからチャンディガールへ、

巨匠たちの足跡を追って

マルコ・ビアージ

参照 | 本誌 pp.50-61

今日インドで大学を建設することは、西欧の建築設計事務所にとって、ル・コルビュジエとカーンがチャンディガール(1951-65)、アーメダバード(1962-74)、ダッカ(1962-83)で行った大規模プロジェクトの遺産に対する観念的な力試しを意味する。いずれも、現地のコンテクストをその文化的・環境的特質において解釈することによって、インド亜大陸における近代建築伝統の礎を築いたプロジェクトである。今回、魅力的だが骨の折れる挑戦に白羽の矢が建てられたのは、ナイル・マカルクとヴァレリー・ムルヴィンというアイルランドの2人組建築家である。2人とも生粋のダブリンっ子で、ローマで建築を学んだ。グループ91の最年少メンバーとしてテンプル・バー地区の都市再開発計画に携わった時から、ジョイスの街で活動している。この歴史ある都市のコンパクトな街並みを身近に感じながら建築修業をし、ただしヴォキャブラーにおいて完全にモダニズムを志向するマカルクとムルヴィンは、パンジャーブ地方の平原で、領域的と呼ぶべき広大で希薄な風景と、細かい粒のような混沌とした建造物と対峙することになった。こうした風景の上に以前からある寄宿学校と大学学部の巨大だが個性のない建物は、規模の大きさを主張するもののキャンパス全体に秩序や認識できるデザインを与える力は持っていない。

タパー工科大学(TIET)は企業家カラム・チャンド・タパーが、基礎研究と応用研究を通して製造業を奨励するため1956年に設立した私立の工科大学である。創立以来、キャンパスは大きく成長し、現在は100ヘクタールを越える面積を占めている。キャンパスは科学技術系大学の典型的なスキームに従って、独立したブロックに分かれる。タパー工科大学の発展にとって重要な刺激が、新取締役会長ラジーヴ・ランジャン・ヴェデラーによって近年与えられた。彼も企業家で、企業経営の視点から大学を運営している。全世界の大学への訪問と国際交流プログラムを始動させたのは彼の功績である。その一環

無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。

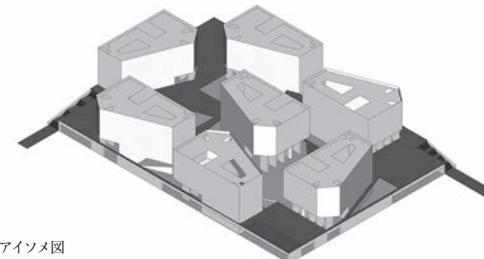
©2019 Arnoldo Mondadori Editore

©2019 Architects Studio Japan

として訪問したダブリンのトリニティ・カレッジにおいて、ヴェデラーは学習と革新に適した研究環境を作るうえで建築の重要性を発見した。彼は複数のアイルランド人建築家に招待状を送り、パティアーラの大学キャンパスを見学してその刷新と拡張のプロポーザル案を作成するよう要請した。招待者の中にマカルク・ムルヴィン・アーキテクツの建築家2人もいた。彼らは機能的な建物ユニットを緑地の中に開放的に配置することによって、キャンパスの脆弱な編み目に秩序を与える1本の軸線を導入した。3つの新しい建物群を連続して並べ、形態的に連関させたため、この主軸ははっきりと認識できる。3つの建物群は屋根付き通路で連結された。この歩道は端から端まで大学施設群全体を縦断するように伸びる。新たな建設計画は東から西に次の施設を包含する。まず面積6万m²のアイコン的なラーニング・センターはキャンパスへの入場門の役割を帯び、図書館、情報学部、権威ある教壇から

講義する18の教室群が置かれた。また定員500人の女子学生寮と定員2,000人の男子学生寮がある。すべてタパー大学の自己資金で進められた事業のため、時系列的に学生寮の実現が優先され、寮費引き上げに伴う増収で教育スペースの建設費用が補填された。

2015年6月に設計の委嘱がなされ、女子学生寮および本稿で取り上げる男子寮の第1区画(7本の高層タワーのうちの4本で、男子学生1,140人を収容)は、2017年8月に竣工し学生たちが入居した。男子学生寮は利用者がかなり集中すると想定されたため、マカルクとムルヴィンは、統一的な巨大集合住宅のような個性を奪う解も、同形ボリュームを並置して容積を過剰に分割する解も排除した。代わりに採用した妥協的なスキームは、個性を与えるという原則と、建築的まとまりの臨界質量(最小必要量)を両立できる。選ばれた全体構成は7本の同形のタワーで1クラスターをなすもので、タワーはそれぞれ8階建て、台



アイソメ図

形平面で方角は異なり、約180×130mの矩形の基壇によって強固に固定される。空洞とされた基壇内部には、独立した共有設備が置かれた——体育館とスポーツ設備、食堂、受付、木々が植えられ池から涼風の吹く広場。その成果は、ムガールの要塞のようにコンパクトで彫塑的な、塔を持った1枚のプレートとなった。それを中心に柱のようなブロックが展開し、外からも内からも間断なく変化する立面、パースペクティヴ、輪郭を生み出す。歩道ネットワークは主に2段階に分かれる。太陽光から保護された地表近くの歩廊には共有設備が配置され、地上9m



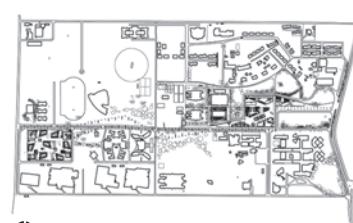
基壇上部へのアクセス階段



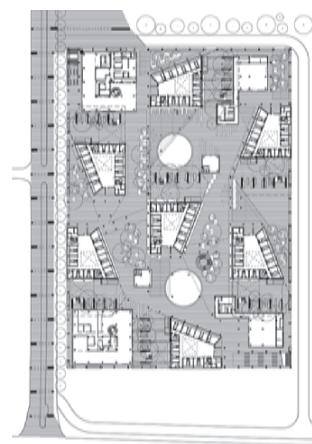
広場より見る



東からの全景



全体配置図/平面図/断面図



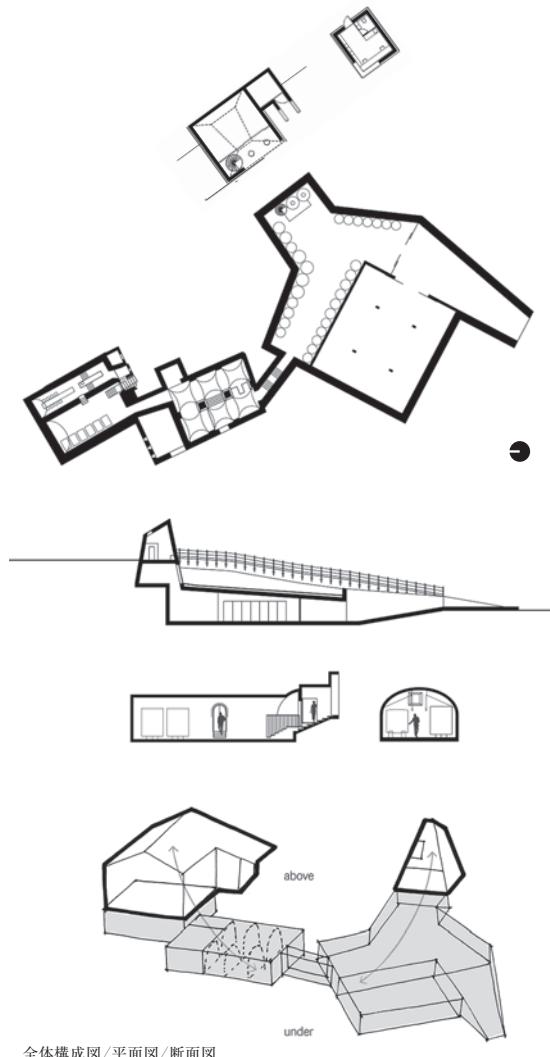
無断での本書の一部、または全体の複写・複製・転載等を禁じます。
©2019 Arnoldo Mondadori Editore
©2019 Architects Studio Japan

2016年にフーバー一族はマーザの歴史的ワイナリーを修復し、ワイン製造スペースを新築して拡張することを決めた。ベルクマイスター・ヴォルフ事務所に再びパッヘルホフへの介入的工事が依頼された。今回の課題は、マーザの伝統的で確固としたイメージの隣に、生産活動にとって機能的であるとともに、コミュニケーションの観点から効果的な近代建築を建てることだった。

既存のワイナリーの地下スペースへの介入的工事は、リノベーション計画を通してこの場所の性格や歴史的価値を保存し際立たせるという、所有者のフーバー一族の認識と意志を証明している。例えば、試飲ホールでは新設の家具調度と檻板張りの床(床暖房を備える)が、古い壁からはっきりと区別されている。[縁を切るという]同様の解は、外の中庭からワイナリーの第1室に連絡するステールと圧延パネルで設えた階段にも、新しいコンクリートの床にも採用された。さらに、中央の大ホールでは交差ヴォールト天井が架けられ、檻板パネルで上下2層に分かれた棚に熟成樽が置かれた。屋外に向かう新しい扉(と内側の、試飲ホールとエントランスの断熱扉)は、蝶引きされたステール・パネルでできている。LEDを使った人工照明は、特別にデザインされ職人が手作業でつくった吹きガラ

スの吊り下げ式ランプである。設計案の微細なディテールまで、既存建築の農村的性格との合致を模索する意図が読み取れる。

まったく異なる様相を呈しているのが、増築された新しい地下スペースである。ワイナリーの中央ホールに1本の短いトンネルと階段で連絡する。大空間は傾斜する地面の下に掘られ、八角形の平面には2つの補足部分がある。南側の、2枚のコンクリート壁に挟まれた1本の車用スロープで地下ホールと地表が結ばれる。北側には掘削によって大きな矩形のニッチができる、1本のスチールの螺旋階段と、ブドウを落とすための2本のダクトで上階とつながっている。加工作業と倉庫の用途にあてられ、ステンレス製の醸造用桶がたくさん置かれた新築の地下空間は、ざらざらした漆喰を吹き付けた壁とコンクリートの床とされた。いずれも作業場の性質に適した仕上げである。新築のボリュームは最後に、切断されたピラミッドという抑制されたフォルムで地上に姿を現す。パッヘルホフの駐車場広場の北東の隅に当たる地点に、斜面から立ち上がる。既存のワイナリー施設と意図的に距離を離しながらも、連関している。環境変化と光を反射するよく磨いた真鍮パネルで全体を覆われた謎めいたオベリ



全体構成図/平面図/断面図



駐車場広場よりピラミッド・タワーを見る



敷地模型



ピラミッド・タワー:下部の壁をスライドさせるとブドウ搬入口となる